名護市文化財調査報告－2

久志貝塚

緊急発掘調査概報

昭和55年3月

名護市教育委員会

はじめに

久志貝塚遺跡は、昨年七月、宅地造成中に発見され、しかも、二軒の建築が着工される直前のことでした。両地主とも、すでに資金のことや請負業者も決まっており、当遺跡の現状保存は断念し、止むなく緊急発掘調査をすることになりました。

当遺跡の発掘調査を通して、久志部落についてはもちろん、名護、山原の歴史を解明していく上に貴重な資料を得ることができました。

名護市では、はじめてのこの遺跡発掘調査に際し、地主の島袋慧氏、宮里義明氏をはじめ、調査員の方々には、期間中無理なお願いをすることになりました。記してお礼を申し上げます。さらに久志部落（クシグヮー）の方々の興味関心と様々な形の参加に支えられ、この調査を終えることができました。

ここに、その概要をまとめました。名護市民の大切な遺跡をはじめとする文化財を理解する一助としてご利用いただければ幸いです。

昭和五五年三月二五日

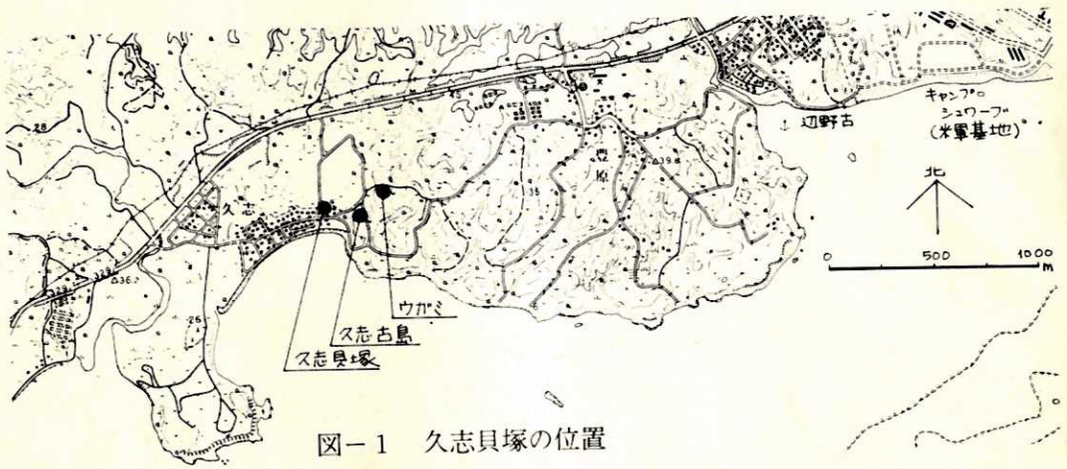
名護市教育委員会

教育長　比嘉太英

目次

Ⅰ 調査の目的 …… 1
Ⅱ 調査の成果 …… 2
一 久志の風土と歴史 …… 2
二 久志貝塚から出土した遺物と遺構 …… 3
三 久志貝塚人タルーとその生活 …… 4
四 久志貝塚とその時代 …… 6
Ⅲ 調査の経過 …… 7
Ⅳ 調査結果の詳細 …… 10
一 久志貝塚遺跡と今回発掘の範囲 …… 10
二 層序 …… 11
三 遺構 …… 12
四 遺物 …… 14
五 近世・近代の遺構と遺物 …… 22
六 久志水田遺跡 …… 23
名護市の遺跡分布図 …… 27

写真－1　久志貝塚遠景　（1.久志貝塚　2.416番地　3.460番地）



図－1　久志貝塚の位置

Ⅰ 調査の目的

遺跡の発掘方法に万能はなく、発掘には、研究者の研究課題に沿った調査目的があり、その目的を達成する発掘の方法は、その遺跡の個性（特徴）に応じて変わる。普通は、発掘調査に先立って、充分な時間をかけて発掘方法が練（ね）られる。しかし、久志貝塚の場合のように、〃緊急調査〃ではそうした時間はなく、また調査の目的ももたないままに進められがちである。

そうした限界のある調査の中で、できうる限り本来の発掘調査に近づけるべく、次の課題を立てた。一つは、久志貝塚の時代（沖縄貝塚時代後期）に水稲作を行っていたか否か。もし水稲作を行ったとすれば、現在水田となっている久志部落北側の低地、つまり後背湿地（こうはいしつち）を久志貝塚人たちがどう利用したかを追究することにした。

もう一つは、久志貝塚と久志部落との歴史的関係を、久志古島（アタイ原、旧集落地）と上里城（うえざとぐすく）とのつながりの上で追究することである。

そして、名護市史づくりの一環としてこの調査を位置づけ、市民の参加のもとに進めることである。

以上が、私たちが立てたこの調査の課題である。

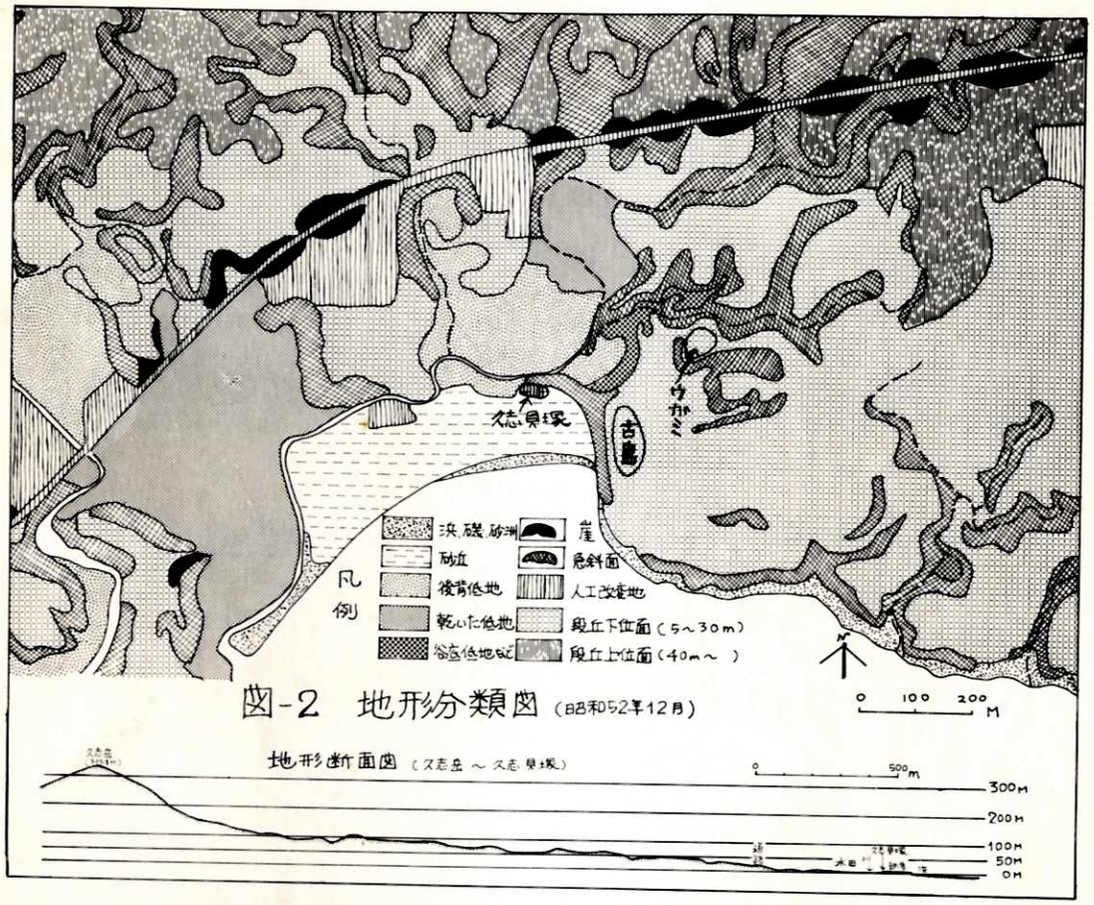


図-2　地形分類図（昭和52年12月）

Ⅱ 調査の成果

一 久志の風土と歴史

(一) 風土

久志部落は、北に久志岳（三三五m）の山並みをかかえ、南は太平洋に面している。そのため、冬の冷い季節風は穏かで、春の訪れは、西海岸よりも二週間ほど早い。海は遠浅で、今は山地・丘陵地のパイン畑開墾などによって赤土が堆積してしまったが、昔はサンゴ礁の幸が豊かであったようだ。

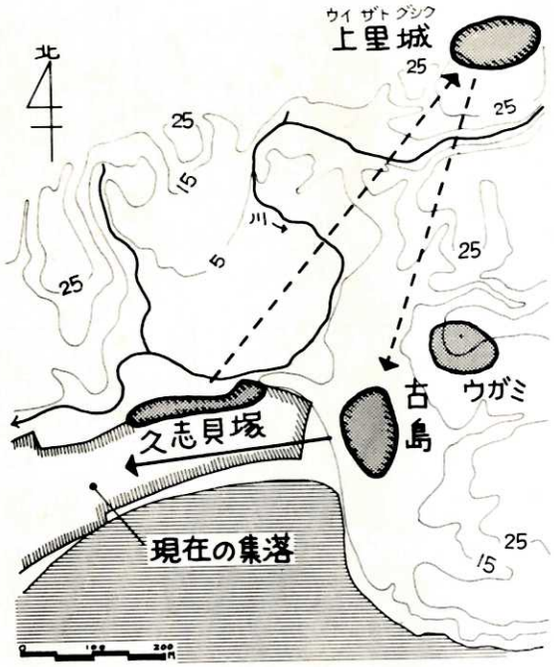
久志貝塚時代の環境を完全に復元することは、現在の調査資料では難しい。陸側の土地条件を、地形分類図（図－2）によって当時を推し測ってみよう。

久志貝塚は、現部落の東側、丘陵の先を北にかかえるところにつくられている。南向きの絶好の立地である。ここは、海の砂が二m余りつもっており、生活環境としては優れていた。すぐ後に丘陵地一帯の水を集めた川が流れ、一帯は、当時なお葦などの水草が茂る湿地であったようだ。この川は、それ以前相当暴れたらしく、川沿いを掘ると、角ばった大きな礫が見られる。ウガミのすぐ南の低地は、小さな谷を刻む先にひろがっており、下の田よりもわずかに高く、乾いている。タードゥーシがよくできるところである。このあたりは、久志貝塚の人々も或いは米をつくっていたかもしれない。総じて、久志は、山原でもいい土地に恵まれつつ、貝塚人たちが住み、これまで続いてきた部落といえる。

(二) 歴史

久志部落のまわりには、久志貝塚、上里城遺跡、久志水田遺跡、久志古島遺跡などがある。これらは、貝塚時代後期の久志貝塚から始まって現部落に至るまで、時代的に連続している。

久志部落が久志古島から移動してきたことは確かである。そして古島以前、上里城遺跡が久志の集落であったことは、時期的にも、グシク遺跡と部落の一般的な関係からも可能性が高い。さらにさかのぼって、久志貝塚をみると、この遺跡はグシク時代初期まで続いているので、上里城遺跡以前の久志部落の集落を想定するとすれば、久志貝塚をおいて他にはないと思われる。



図－3　久志の村落移動

遺跡＼時期区分	原始・古代							近現代
	貝塚時代			グシク時代			琉球王国時代	沖縄戦時代
	前	中	後期	前	中	後		
現久志部落								――
久志古島						――		
久志水田遺跡					――	――		
上里グシク				----	----	----		
久志貝塚			――					

表-1　各遺跡の存続期間

二 久志貝塚から出土した遺物と遺構

久志貝塚は、発見して調査を行うまで、遺物の量は少ないであろうと予想されていた。ところが、発掘が進むにしたがい、出土する遺物の量と質の豊富さには目を見はるものがあった。

(一) 土器について

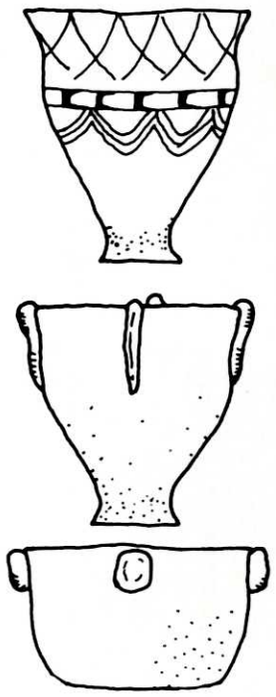
土器は、それぞれの時代に生活した貝塚人たちの生活の移り変わりや、地域相互の違いを示す好資料として扱われる。

久志貝塚から土器片が約一万三千個出土した。これらの土器の中には、竹を割った先で口縁部に網目状に模様を描いた土器、また、土器の口の方から背部に粘土を貼りつけた土器、さらに口の部分に粘土をコブのようにつけた土器など、三種類あった。これらの土器は、古い時代からより新しい時代をめざして変動する過渡期の時代に作られた土器と思われる。

調査が終了して土器を水洗いする時に、思わぬ発見があった。今まで、久志貝塚と同時代の遺

遺跡とは　過去の人々の活動した様子が、遺物や遺構で残されている場所である。それらは、当時の人々の活動・思想・社会関係を表現する歴史資料である。

跡からは検出されなかった籾の圧痕が土器に残っていたのである。このことから、すでに久志貝塚人たちは稲を植えて米を食べていた可能性が強くなった。



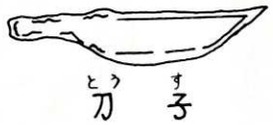
復元された3種の土器

(二) 石器について

久志貝塚は石器時代の遺跡として位置づけられるが、その時代を代表する石斧の出土が一個もない。一般的に、後期砂丘貝塚時代の遺跡からは石斧の出土が少なく、まれに刃のなまった石斧が出土する。こうしたことは、すでに沖縄の後期砂丘貝塚時代や久志貝塚の時代に、石斧にかわる鉄斧が使用されていた可能性を示唆している。

(三) 鉄器について

貝塚時代の鉄器が出土した。腐蝕がひどく、原形をとどめないが、刀子（ナイフ）の柄の部分と思われる。これは、木器を作ったり、籠を作る時に用いられたと考えられる。



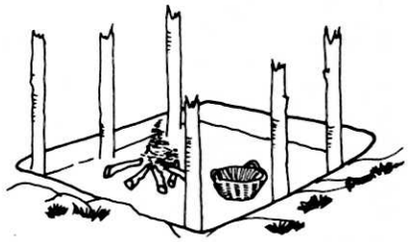
刀子

(四) 遺構について

貝塚人が作った住居跡らしき遺構が、六軒検出された。

一号遺構は、現部落道路の真下に作られていた。砂に、横が二m五〇cmの長方形らしき竪穴を掘り、その下に、近くで拾い集めた礫を敷きつめ、内部に柱をたてた跡が観察された。

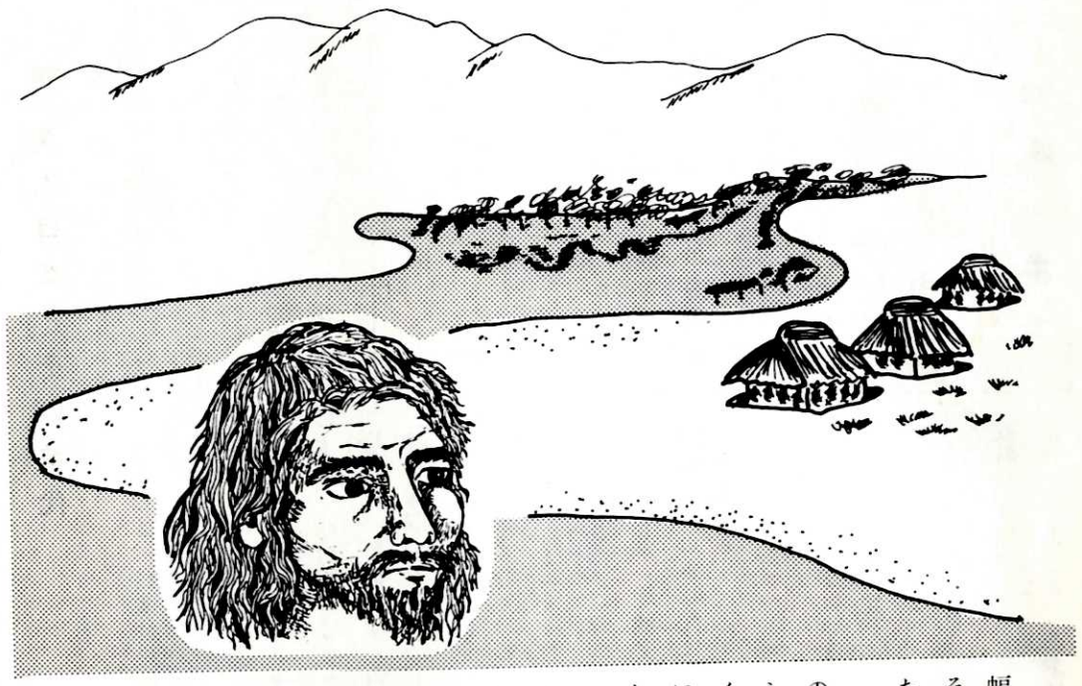
アタヌ屋では、二号から六号遺構が、丘すそあたりで重なり合って発見された。造り方は、一号遺構と同じく、地面を掘りくぼめて造られている。異なっている点は、礫を敷きつめるかわりに、粘土で堅く踏み固められていることであるが、断言はできない。また、貝塚時代にこのあたり一帯で大火事があったのだろうか、粘土や砂が真赤に焼けていた。



廃棄された住居址

三 久志貝塚人タルーとその生活

久志貝塚人タルーは、後期砂丘貝塚時代中葉からグシク時代初頭にかけて活躍した人である。タルーは、部落の長の七男坊に生まれた。ある年、久志岳が新緑に包まれる頃、貝塚人タルーは成人に達していた。体格を推し測ってみると、タルーは背丈一五六cm、現代人より背は低いが、骨格はたくましく、筋肉が発達していた。



タルーの住まいは、北風や台風を避けるためであろうか、丘すそに作られていた。幅約二・五m、縦三・五mで、数十cm掘りこんだ隅の丸い方形をした竪穴である。その内部に何本かの柱をたて、木を組み合わせ、その上に茅を載せた。床は砂地のためか、赤土や石を敷きつめ、住居の中で火をたいていた。

貝塚人たちは、その環境に応じて様々な生活の工夫をこらしていた。久志岳一帯の山からは、木材や薪をとりだした。また食糧として、シイの実、あるいはイノシシなどの山の幸に恵まれていた。海は、貝塚人たちにとって重要な幸をもたらしてくれた。タルーは、海人としては近くの貝塚人たちの間で名が知られていた。季節に応じて、ヒシ（リーフ）一帯に生息する大小の魚貝類の採集はお手のものであった。時にはジュゴンなどの大形獣をしとめ、部落の人々を湧かせたりもした。

タルーは、石器時代の人といわれているが、石斧を作る技術を忘れかけていた。タルーたちは、石斧にかわる鉄斧や、その他の鉄器類をすでに使いはじめていたからである。ただ、十分に使う量は持っていなかったので、鉄器は大事に使った。

久志部落の背後を流れるシチャヌカー（下の川）は豊富な水をもたらし、中流あたりでは、土器を作る粘土が得られた。タルーのお婆は土器を作るのがうまく、最後の仕上げは、口の部分に好んで装飾的な模様を描いた。しかし、新しがりやの女房は、模様を描くかわりに、土器の口に取手のようなコブを貼りつけ、実用性を重んじて土器を作った。その様子を側で見ていたタルーは、祖母と女房との間に、生活や考え方に大きな違いが生じ始めているのを感じていた。

事実、祖父や父の代には、海が最も重要な生活の糧の場であったが、タルーたちの代からは、部落背後の湿地で稲づくりが定着しつつあったのである。海よりも、陸で働く日が多くなってきた。久志貝塚人たちの生活は大きく変わろうとしていた。時に貝塚時代が終わろうとするグシク時代初頭（千年前）のことである。

四　久志貝塚とその時代

久志貝塚は、沖縄の考古学上の時代区分では、貝塚時代後期の後半からグシク時代の初期にまたがることが、土器の型式から明らかになった。ところで、貝塚時代後期後半からグシク時代とは、いったいどういう世の中だったのであろうか。

貝塚時代というのは、沖縄の歴史の上で、経済的にはまだ農業社会になっておらず、自然の産物を採取することによって生活を支えていた採集経済の時代である。また、文化的には、日本本土の縄文文化や弥生文化の影響を受けつつも、沖縄的色彩の強い地域文化の時代である。貝塚時代は、本土の縄文時代後期から弥生時代を経て平安時代に至る期間に対応している(表－2参照)。つまり、本土では弥生時代にすでに農業社会となっていたのに対し、沖縄では、本土の平安時代後期頃までまだ採集経済社会であった。農業社会にはいったのは、平安時代末に始まるグシク時代からである。

表－2　時代区分表（沖縄・本土）

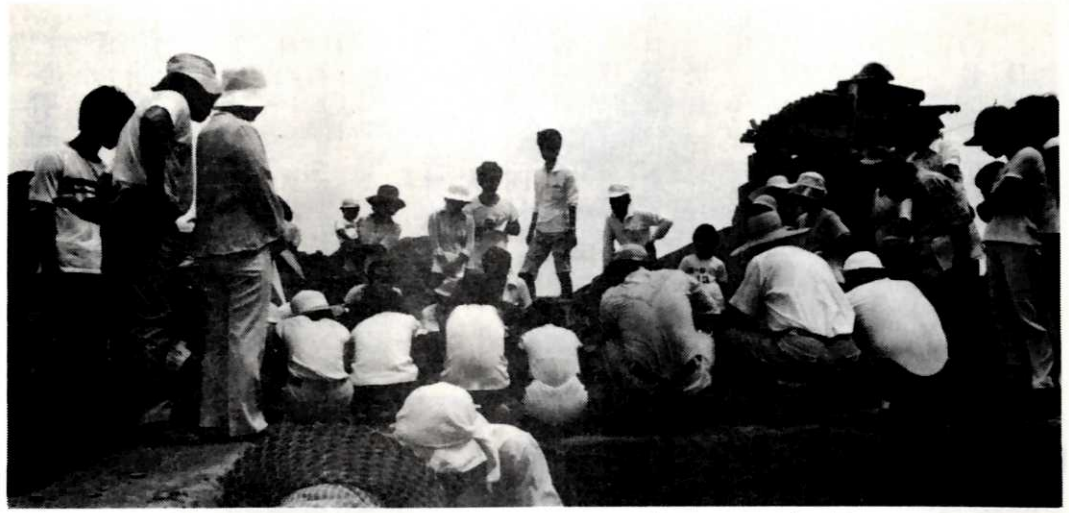
沖縄		グシク時代	貝塚時代		?	縄文文化						
			後期	前・中期								
本土		室町時代	鎌倉時代	平安時代	古墳時代	弥生時代	晩	後	中	前	早期	
							縄文時代					

しかし、沖縄の貝塚時代にまったく農業が行なわれていなかったとは断言できない。とくに貝塚時代後期は、前期と文化様相が変わり、弥生文化の影響があった。たとえば、埋葬の方法、土器の形、貝製腕輪などにそのことが認められている。また、弥生式土器もはるばる海を渡って運びこまれているから、それとともに水稲農業技術も伝えられた可能性は十分にある。今回の久志貝塚の調査で出土した籾痕のついた土器は、その証拠と考えられる。

けれども、貝塚時代後期は、つまるところ貝の採取、魚類の捕獲といった漁撈生産にたよるという範囲内にあったようである。長い停滞的な貝塚時代も、一二世紀頃に終わり、かわってグシク時代という農業社会に変わった。この時代は、麦畑作と水稲農業の時代で、また、盛んに海外交易を行なった時代であった。久志貝塚人たちはこのような時代に生きた人々であった。

モノから年代を知る

大昔にも流行があり、人々がつくったモノの形＝型式は、時代とともに変化する。この型式変化を利用して、モノの新旧を知ることができる。この型式変化の新旧関係は、出土する時の層の上下関係からも確かめられるし、また、だいたいの年代については、ラジオカーボン測定によっても測ることができる。



Ⅲ　調査の経過

ひとつの遺跡を発掘調査し、地域の昔の歴史を明らかにしていくには、多くの準備と人手とお金と時間を必要とする。遺跡の発掘調査は忍耐を要するが、毎日、昔の人々の生活の姿を発見し、直接ふれるというドラマと楽しみの連続でもある。

この久志貝塚遺跡の発掘調査も、台風来襲や毎日の見学者など、いくつもの出来事を経ながら進められ、そして終えた。こうした遺跡の発掘調査の中味の一端を、写真をたどって見てみよう。

▶ 発掘前の久志貝塚。向こうがA地区、手前がB地区。

▶ 発掘に先だち地形測量を行なう。

遺跡はどのように発見されるか？

遺跡は、ふつう地中に埋もれている。それが自然の崩壊や、畑や宅地の造成の際、遺跡にある土器などの遺物が地表にあらわれることがある。遺跡は昔の人々の生活の跡なので、それを含む土はたいてい黒っぽい色をしている。そこに土器や石器が発見されると、確かに遺跡であるといってよい。

あなたの土地に遺跡があったら！

あなたの庭や畑に、土器や石器、古そうな陶磁器の破片、貝殻などが落ちていたら、遺跡の可能性がある。すぐ、市教育委員会（二一－二八一九）に連絡し、遺跡かどうか確かめる必要がある。保存するか、調査するかは、条件をふまえて、話し合いによって決める。

発掘調査日誌

七月八日　久志貝塚遺跡発見
七月下旬　緊急発掘調査を行なうことを決定
八月上旬　発掘調査体勢整う
八月八日　久志有志会説明会
八月一〇日　予備調査に入る。地形測量、グリッド設定
八月一五日　島袋さん方（A地区）の本発掘開始
八月二三、二四日　台風
九月一日　宮里さん方（B地区）の発掘開始
九月五日　島袋さん方、埋め戻し
九月二六、二七日　台風
一〇月三日　宮里さん方、埋め戻し。発掘調査終了
一〇月五～七日　・久志貝塚展（於・久志公民館）
一〇月中旬～三月末　久志貝塚資料整理、報告書作成

▲ 遺構を実測する調査者。大切な作業である。

▲ A地区の発掘すすむ。後は久志岳。

▲ 礫にまじって1000年前の土器が出土した。

▲ 1000年前の住居址がでる。説明を囲む見学者たち。

▲ 二度も台風に見舞れ、砂のあぜが壊れた。

▲ いくつもの柱の穴が検出された。

▲ 長かった発掘調査が終わり、元どおりに埋めもどした。

遺物の保存と活用

このように、遺跡を発掘調査し、昔の人々の生活と歴史を明らかにするには、多くの人手と時間を要する。そこで得られた遺物等の多くの資料は、さらに多くのことを語っていくに違いない。遺跡から出土した様々な遺物は、私たちが共有する文化遺産として、きちんと整理し、いつでも利用できるように、公共の博物館や資料館で保管していく必要がある。

久志貝塚の見学

久辺小四年　宮里満男

「お知らせいたします。石嘉市教育委員会が久志貝塚についての説明会を午前十時から行ないます。区民のみなさん、生徒のみなさん多数ごさんかください。」

と公民館から放送された。

ぼくは急いで車に乗って村の東のわにある貝塚の発くつげん場に行った。

この久志貝塚について新聞、貝塚ニュース二号で初めて知った。それには八月十五日から一カ月の予定で作業をすすめるということだ。ぼくはさっそっの日の夕方そこを見に行った。今日で二回目だ。

この貝塚というのは正方形の古い屋しきのあとで、そこに近いうち住たくをたてることになっていたそうだ。その回りには家がたくさんあって後の方には小高い森がある。その森をはさんで小川が流れ広い田が開けている。

発くつけん場はミメートルほどの正方形のあなが、たて横ちんとなるならべられて、十五ほどほられている。深さはどれも五十セン手ぐらいだ。このあなとあなの間はミナセンチメートルほどあって、この部分はそのまま残されてあぜ道になっている。

かんかんてりつける太陽と風のこないあなの中で、ちょうど員七人と村のおばさんたち五六人が、熱心にあせを流してはたらいている。竹で作ったへらで地そうを見ながらかわをはぐように、ゆっくりゆっくりとほりおこすのだ。とても細かい仕事でたいへんだろうなと思った。

ぼくと父は説明会が始まるまでまだ時間があったのであぜ道をゆっくり歩いてあなをながめることにした。バケツやビニールなどの入れものにはかわらのかけらみたいなものがあった。何かのほねもあった。ぼくはこの赤いかわらみたいなかけらがどんな道具で何のために使われたのだろうかと不思議に思った。どのあなでも石があるとその部分だけ残されて土がほり出されていた。

ひととおり見て回ったころには村の人々が五十人ほど集まっていた。

四角形にほられたあなのことをピットとよんでいるらしい。あるピットには石がしきつめられていた。その大きさは大小さまざまなものがあったけれどだいたい手のひらほどのものが多かった。そのすき間にはかる石がしきつめられていた。そこは今からおよそ千五百年前の大むかしの人々のねくらであったということだ。かる石は水分を取る役目でその上に草をしいてねたということだ。

その近くのピットには黒すんだ土と石があってそこは火を使った後だということだ。そのそばにはかわらみたいなかけらがあった。それは土きといそっぽのことらしい。これもまた黒ずんでいてなべに使っていたということだ。そのころは貝類・けものをとって食べたということがほり出されたものからわかるそうだ。

このようにしてぼくたちのそせんが生きるためにちえを出して生活していたということはとても感心した。

（まごころ四第14集より）

Ⅳ 調査結果の詳細

一 久志貝塚遺跡と今回発掘の範囲

久志貝塚遺跡は、現部落の東奥のヌル殿内付近から、西の公民館裏にかけてひろがっていると想定される。今回発掘調査を行なったのは、そのうち東寄りの宅地二筆（二四、二五番地）を中心とする範囲である（図ー4参照）。

図ー4 グリッド設定図

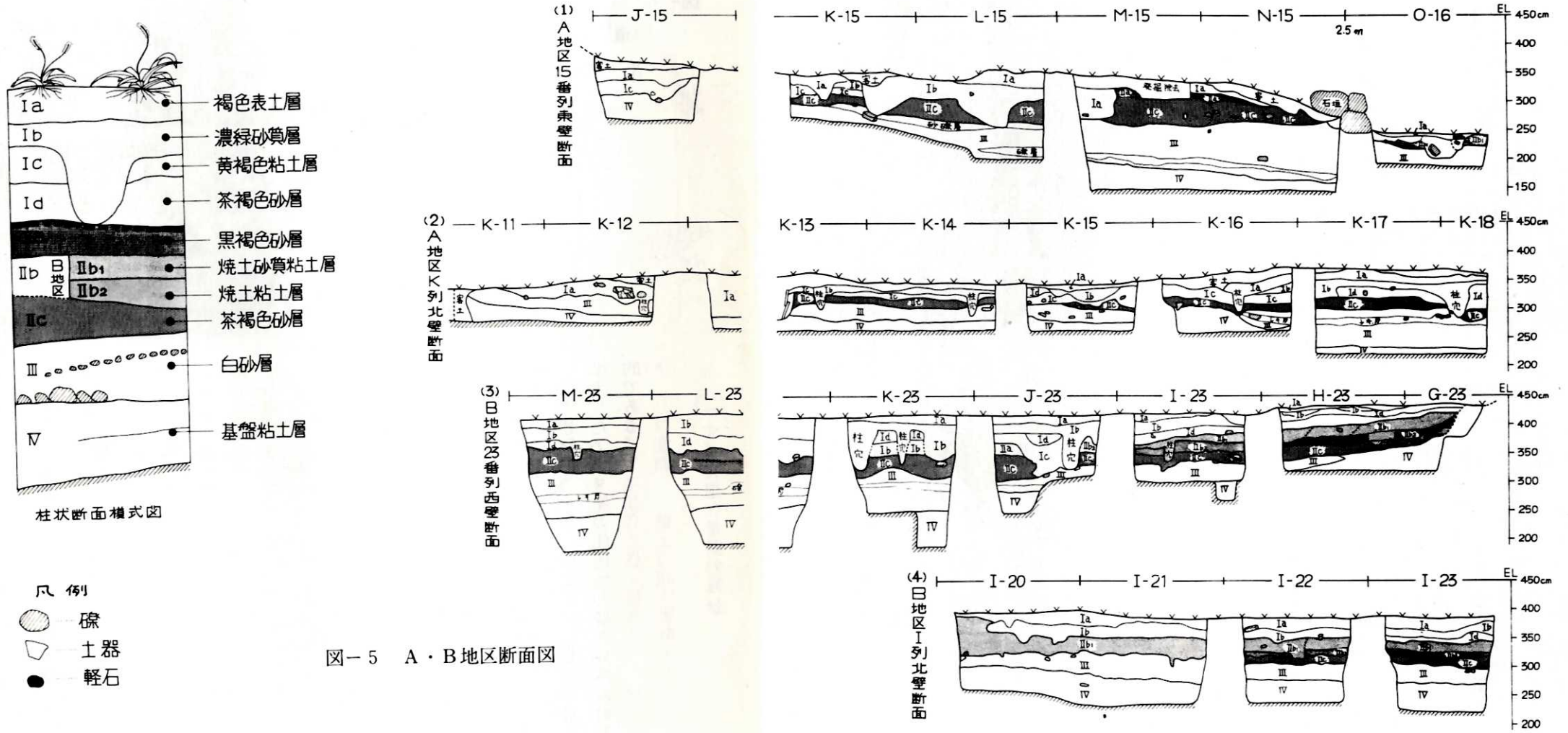
二 層序

（イ）Ⅰ層　Ⅰ層は、IaからIdの四層に細分される。近世から現代にかけて堆積した文化層である。Ia～Id層は、A・B地区の両屋敷に堆積する。Ia層は、陶磁器類に混って貝塚時代の土器や貝類を多量に含むことから、調査区以外の貝塚時代の包含層を崩して屋敷地造成に利用したと思われる。また、柱穴状の落ちこみが両地区で数多く検出された。

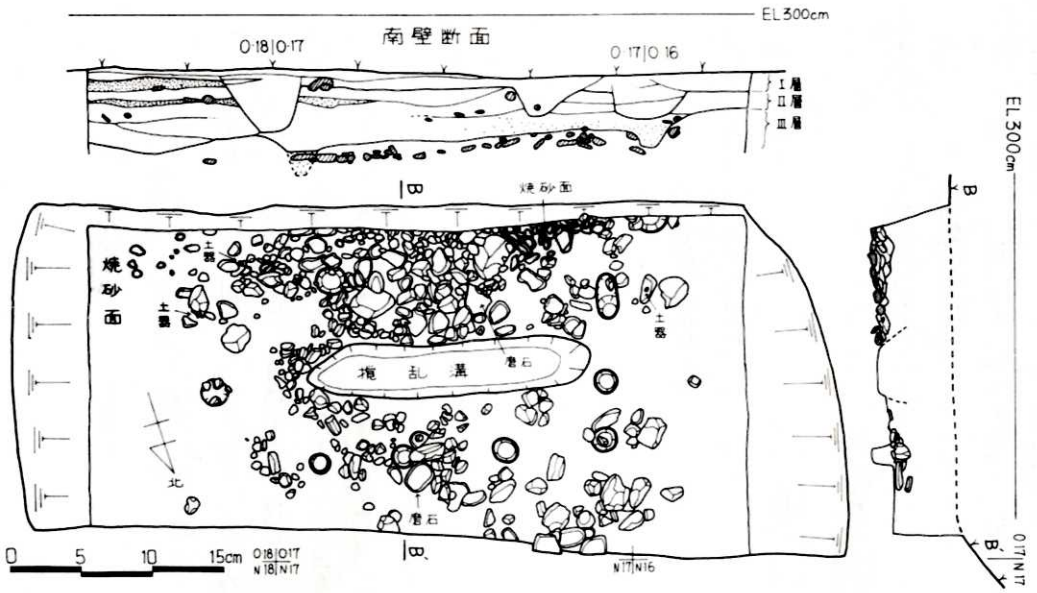
（ロ）Ⅱ層　貝塚時代の層である。A・B地区では異なって堆積する。A地区には焼土粘土層は認められないが、B地区の丘すそ付近で焼土層が認められる。粘土層は人為的な層と思われるが、明らかではない。しかし、粘土層の範囲で遺構が集中的に検出されることから、粘土層と遺構は関連すると考えられる。軽石が全般的に認められるが、とくにⅡa層では集中して観察された。

（ハ）Ⅲ層　自然層であるが、ごく少量の土器片が出土する。丘すそから海岸に向かって傾斜しながら厚く堆積している。軽石をはさむが、風化が著しい。

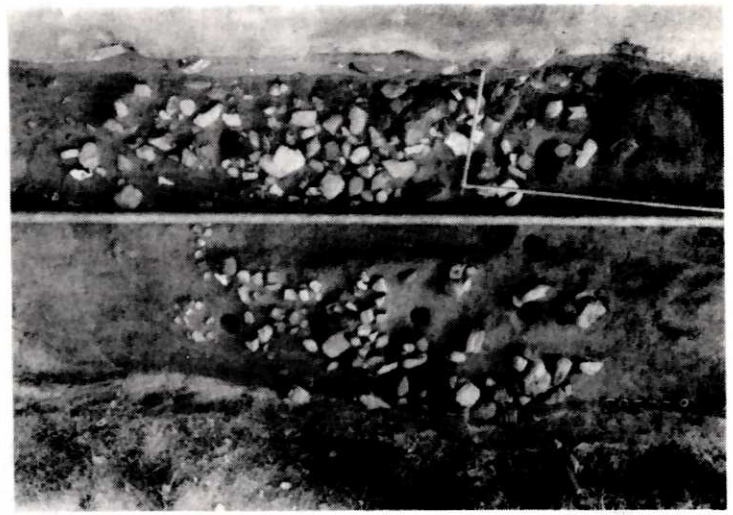
（ニ）Ⅳ層　基盤層である。赤色化した粘土層で、大きな礫を含む。軽石は認められない。



図ー5　A・B地区断面図



図－6　1号遺構実測図（道路下）および出土状況写真



三　遺　構

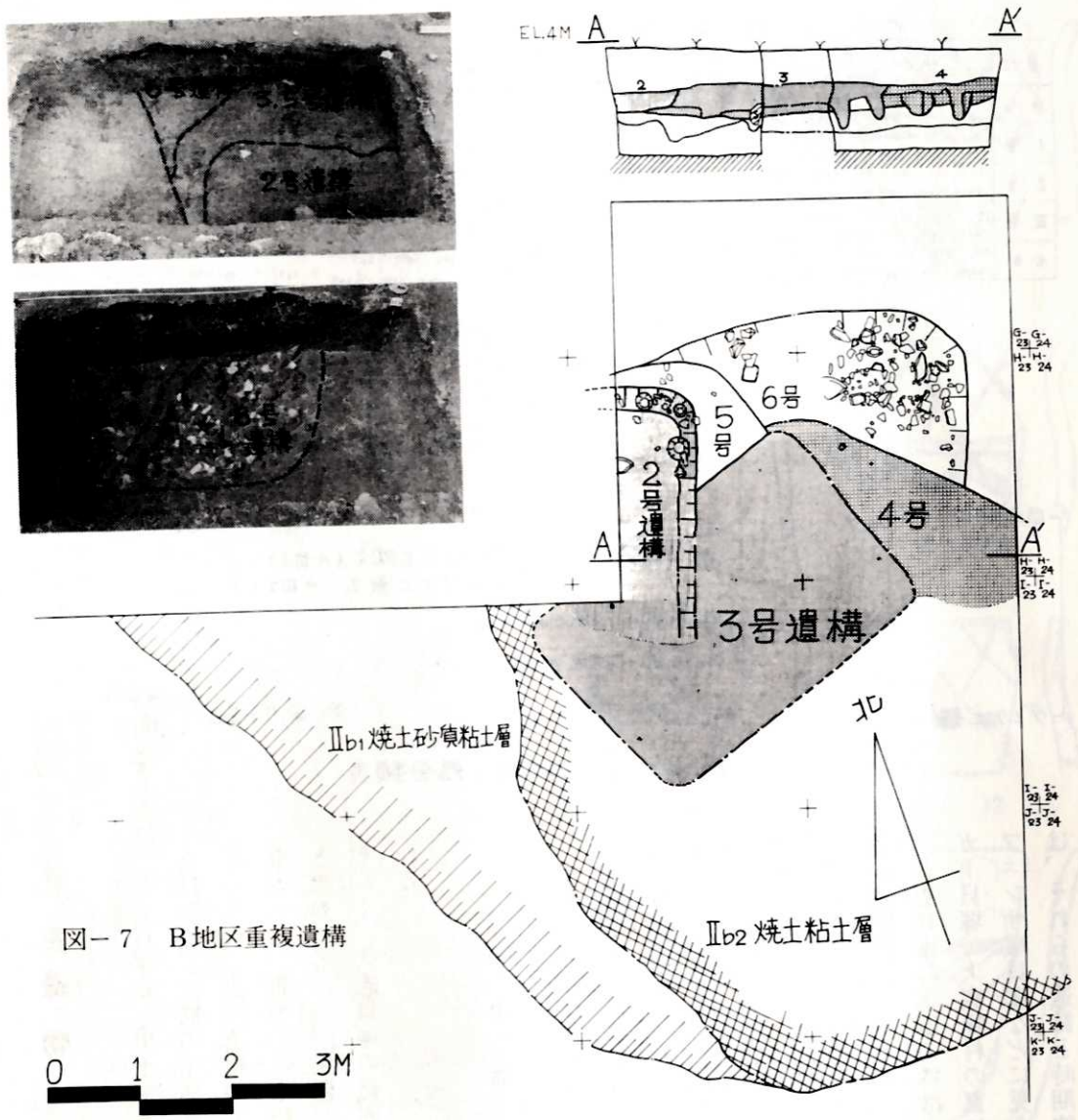
(一) 敷石住居址（一号遺構）

島袋氏宅地の南側道路も、関連して発掘してみた。この道路の下には、貝塚時代の竪穴住居らしき遺構が、いくつか重複してみられたが、水道管埋設のため、道路中央部が深く掘り返えされ、かろうじて最下部の敷石住居址が確認された。

敷石住居遺跡の半分ほどを発掘したが、柱穴（掘立柱の穴跡）の並び方から、長方形の建物と推定された。土床面には石が敷かれていた。

また、断面の観察から、この建物が白砂を浅く掘りこんでつくった竪穴であることもわかった。建物内にはたき火跡があって、砂が赤く焼けていた。

この建物内の土器は少なく、土器が多量に出土したアタヌ屋の住居址とはたいへん対照的である。



図－7　B地区重複遺構

(二) アタヌ屋の重複住居址

(イ) 二号遺構　覆土にⅡb1が堆積する。焼土化しており、多量の土器・炭を含む。粘土層は検出されなかった。三、五号遺構を切っている。

(ロ) 三号遺構　覆土にⅡb1、Ⅱb2が堆積する。Ⅱb2は床面の可能性が高い。床面の焼土化は他の遺構より著しい。土器・炭が多量に出土する。各ピットの断面に粘土面が確認された。不明瞭ながら、遺構が長方形の形をしていると理解された。

(ハ) 四号遺構　覆土にⅡb1、Ⅱb2が堆積する。焼土化している。五号遺構と接する部分がないため、前後関係は不明である。

(ニ) 五号遺構　覆土にⅡb1、Ⅱb2を含み、Ⅱb2は床面の可能性が高い。土器・炭を含むが、あまり焼土化していない。

(ホ) 六号遺構　覆土にⅡb2を含む。他の遺構に切られているので、検出された遺構ではもっとも古いものと考えられる。焼土化していないが、炭を含む。Ⅲ層上部で礫が多量に出土したが、地形にそって傾斜するので、この礫は自然堆積の可能性が高い。

表-3　A・B地区 遺物集計表

注）[%] [コ]　※ 1コは刀子片

層位	土器 口縁部 有文	無文	計	胴部 有文	無文	計	底部 (いわゆる底)	平底	尖底	計	合計 個数	重さ(g)	石器	陶磁器		磁器	備考	鉄製品	銅製品	貝		骨		木の実	木片	礫
														瓦焼	上焼					二枚貝	巻貝	軟	硬			
表採	4	45	49	3	553	556	13			13	618	4366	1	61	47	21		1	1	2		3				6
	40	341	381	26	3669	3695	290			290				8954	9710	448										
I 層	56	372	428	53	4973	5026	102	2	1	105	5559	38.662	7	374	334	191	6	126	6	458	261	63	3		2	54
	700	3672	4372	332	3144	3476	2382	122	10	2514				20399	2927	1927										
II 層	76	491	567	89	5213	5302	152		2	154	6.023	47.074	7	17	26	11	1	2*		90	28	11	1	2	7	31
	1324	5463	6787	783	36784	37567	2694		26	2720				467	191	92										
III 層	18	64	82	21	408	429	10			10	521	5.352	5	4	5					4	1		1			6
	340	813	1153	218	3708	3926	273			273				140	18											
合計	154	972	1126	146	10749	11313	277	2	3	282	12.721	95.454	20	456	412	223	7	129	7	534	290	77	5	2	9	97
	2604	10289	12893	1999	75645	77644	5339	122	36	5497				29920	7038	2367										

- 貝塚時代後期土器
  - 有文（A）
    - 沈文のみ（AI）
      - 網目文（AI1）
      - 山形文（AI2）
      - 瓜形文（AI3）
      - その他（AI4）
    - 凸帯文（AII）
      - 凸帯上沈文（AII1）
        - 沈文あり（AII1a）
        - 沈文なし（AII1b）
      - 凸帯上無文（AII2）
        - 沈文あり（AII2a）
        - 沈文なし（AII2b）
    - 貼付文（AIII）
      - 貼付文上沈文（AIII1）
      - 貼付文上無文（AIII2）
  - 無文（B）
    - 外器面ヘラ撫であり（BI）
    - 外器面ヘラ撫でなし（BII）
- グシク土器

※ フェンサ下層式…AII2b, AIII2

表-4　久志貝塚土器分類表

四　遺物

久志貝塚から出土する遺物には、土器や石器、陶磁器などの人工遺物をはじめ、人間の生活と関わりの深いさまざまな自然遺物もある（表-3参照）。出土遺物の大半は土器である。陶磁器はI層に多く、わずかながらII、III層からも出土するが、これらは部分的に攪乱をうけたためと思われる。今回発掘した区域では、貝の出土量がきわめて少ない。おそらく、久志貝塚の範囲のどこかに貝塚がつくられているものと考えられる。

(一)　土器

土器の分類は、上の表-4にみるとおりである。有文土器は、沈線文と凸帯文との組みあわせに着目して、また、無文土器については、調整痕と外器面にヘラなでがあるかどうかに着目して分類したものである。出土した土器は、全般的に刷毛目やヘラなで、指なで等により、ていねいに仕上げられている、

底部は、くびれ平底が圧倒的に多いが、数例、平底、尖底ぎみの底部も出土している。焼成は全般的に良好であるが、B地区では、もろい土器が集中して出土した。

久志貝塚の土器の特徴を総合して判断すれば、具志川市のアカジャンガー貝塚、大宜味村の喜如嘉貝塚、恩納村の熱田貝塚、そして糸満市のフェンサ城貝塚などに見られる土器が出土した。したがって、久志貝塚は、それらの遺跡と時期的に共通する遺跡と考えられる。

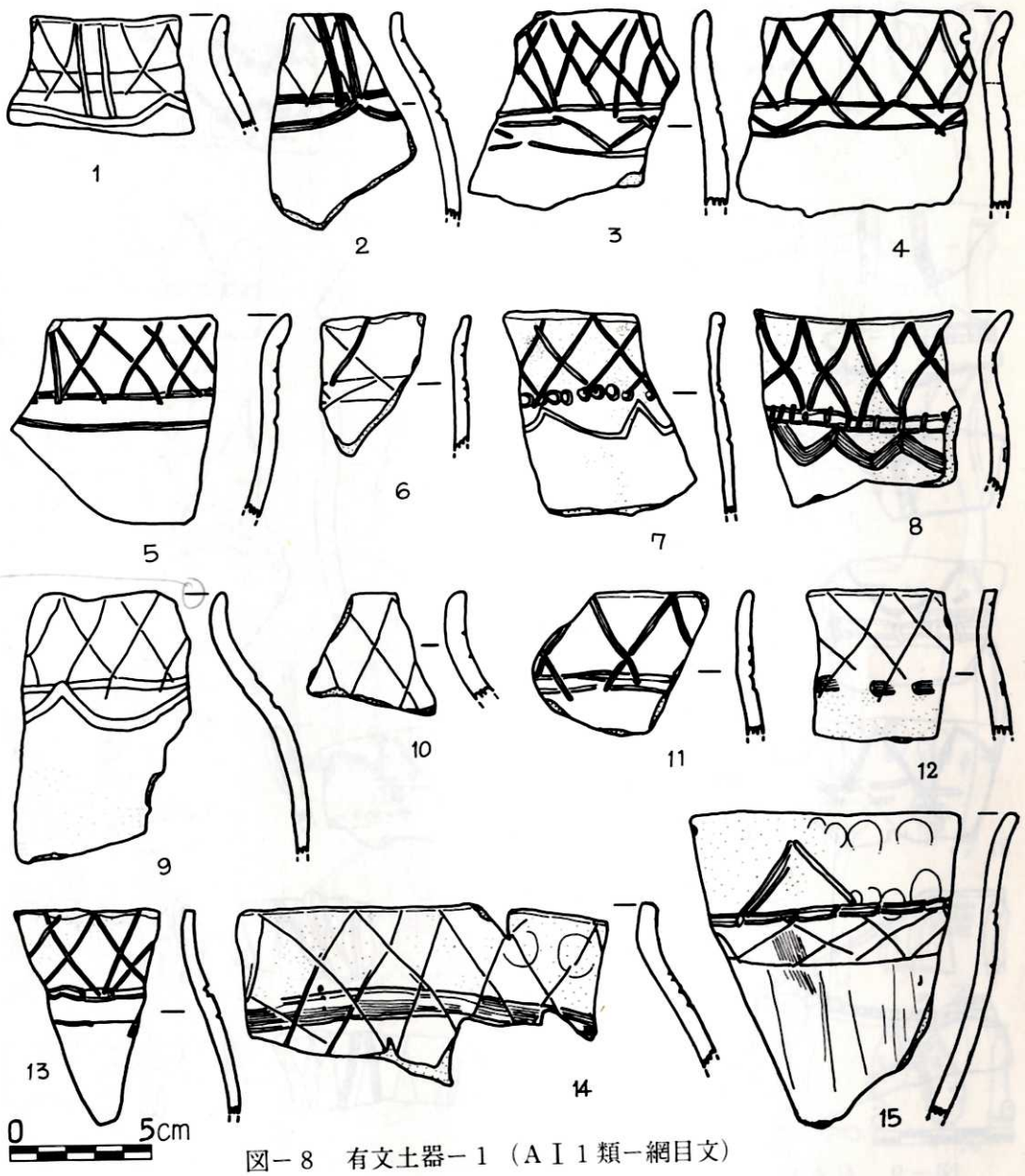


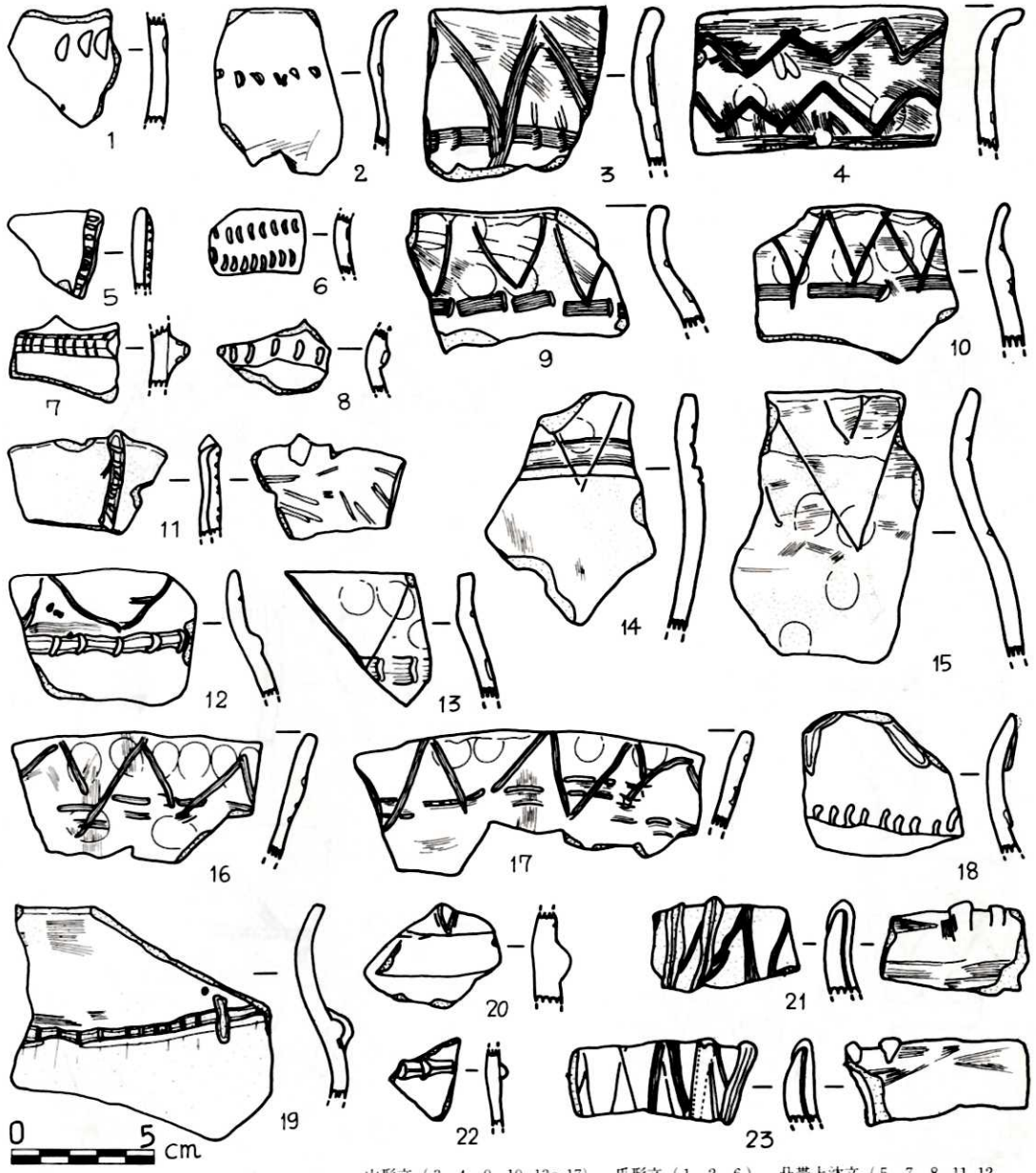
図-8　有文土器-1（AI1類-網目文）

(イ)　有文土器

● **網目文土器**（AI1類）

先端の細い施文具を用い、土器の上半部に網目状の文様を主体に描いてある。久志貝塚でもっとも多い文様の土器である。網目文は、×を交互に描く手法で施されている。網目文の下は、鋸歯状の文様、なだらかな曲線文、横捺刻文などである。鋸歯文が最下にくるものは、網目文との間に横捺刻文を施す組みあわせがある。

全体の形を復原することはできないが、甕形が主で、二、三例が壺形と推定できる。上図の2、3、9の土器は、器面は粗く風化した状態に似ている。これは、土器を焼くときの温度に関係していると考えられる。口唇（土器の上縁）は丸いものと、平たく整えられたものがある。



図－9　有文土器－2

山形文（3、4、9、10、13～17）　爪形文（1、2、6）　凸帯上沈文（5、7、8、11、12、18、22）　凸帯上無文＋沈文（20、21、23）

● **山形文土器**（AⅠ2類）

山形文を上下二条に配列するものと一条のもの、大小のV字を組みあわせたものがある。また、横向きの沈線にはヘラの先端が二叉になったものと、単一のもので施文された二者がある。器形は甕形と鉢形がある。

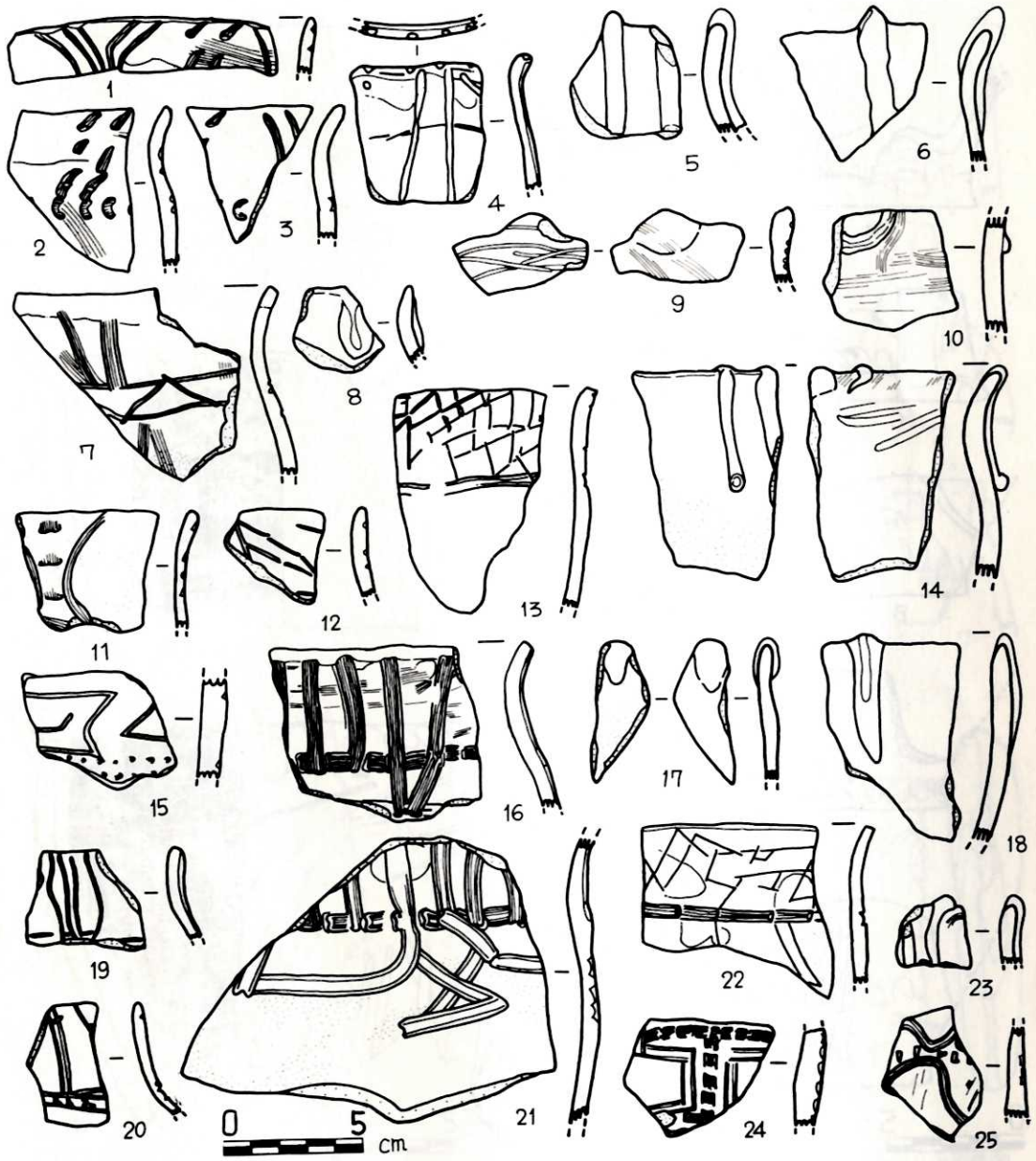
● **爪形文土器**（AⅠ3類）

爪形文は三個出土したが、いずれも小破片である。水平方向に一条走らせるものと、二条のものがある。文様は、たて割りにした竹の先端を突くようにしてつける。

● **凸帯上沈文土器**（AⅡ1類）

この類には、凸帯以外に沈線が描かれるものもある。上図の12は、アカジャンガー貝塚、喜如嘉貝塚からも出土している。19の土器は、凸帯を横に走らせ、縦方向の凸帯は割れているが、口唇までのびていたと考えられる。

● **凸帯上無文＋沈文土器**（AⅡ2a類）



図－10　その他土器およびフェンサ下層式土器

❀フェンサ下層様式（5、6、9、10、14、17、18、23）

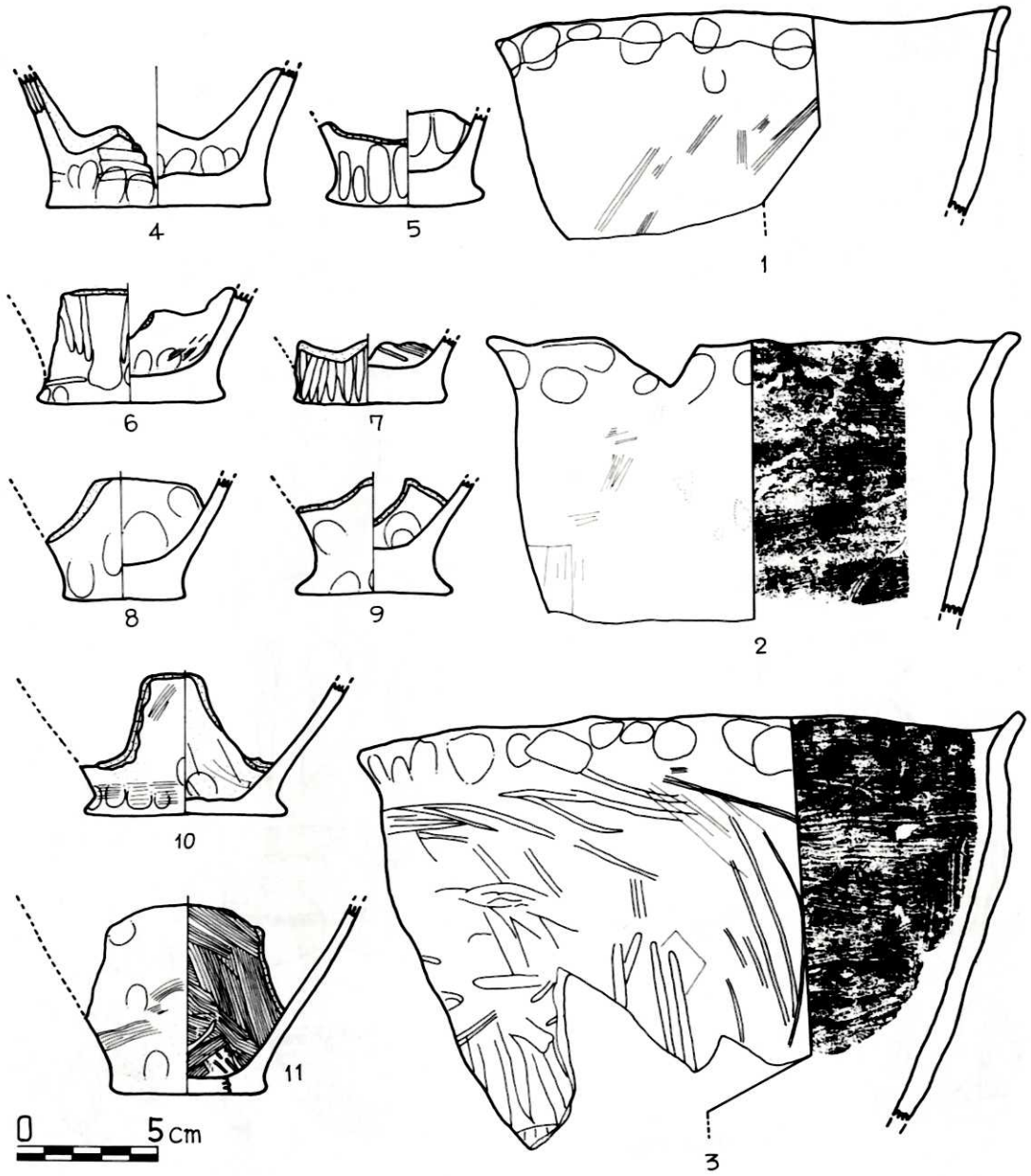
図の18の土器は、文様を施す部分が少し厚目で、土器片の中に石英が混っている。21、23の土器は、鋸歯状の文様を施したあと、縦に二本の凸帯を貼りつけている。

● **その他の沈文土器**（AⅠ4類）

土器分類において、一例のみの出土や小破片の土器は、その他として取り扱った。上の図の1、2、3は同一個体である。4は、口唇部に一定間隔にヘラの先端をつきさした刺突文のある土器片で、他地域の後期砂丘貝塚土器にはよくみられるが、久志貝塚ではこの一例のみである。

● **フェンサ下層様式土器**（AⅡ2b類、AⅢ2類）

縦方向に一本か二本の凸帯をのばすもの（図の5、6、14、18、23）や、口唇部にコブ状のふくらみをつけるもの（17）、口唇の形が山形をなすもの（9）等がある。



図－11　無文土器および底部

※ ヘラなで有り（3.4.5.6.7）　ヘラなで無し（1.2.8.9.10.11）

(ロ) 無文土器

ここでは、外器面のみの分類で、内器面の検討ははいっていない。

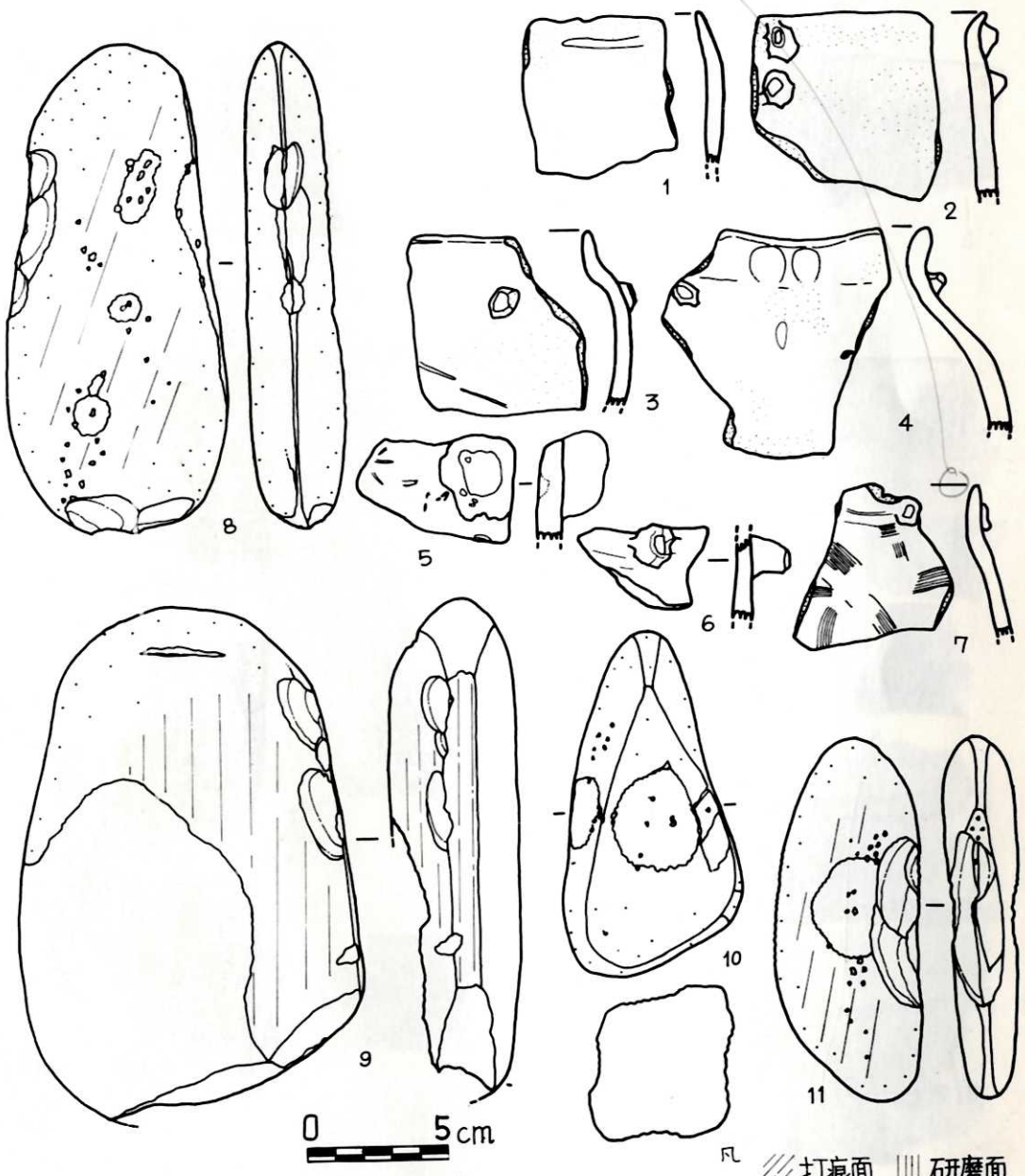
● **無文ヘラなで有り**（BⅠ類）

図の3は、復原できた土器では最大のもので、ヘラの痕がよく残っている。器壁も厚い。内器面は木の板でなでた痕跡である刷毛目を最終調整面とする。底部では、とくに7が密にヘラなでを行なっていて、ヘラ幅がわかる。

● **無文ヘラなで無し**（BⅡ類）

1の土器は、指先を押しあてる指頭圧や指なでによる調整を施しており、口唇部付近には、土器を積みあげるときの粘土紐と粘土紐の境目が残っている。土器製作で、最後に口唇部を作ることがわかる。

2も指なでによる。器形は甕形で、口縁（こうえん）は外にそり、良好な焼きである。底部も指なでによる調整が多い。11は、内器面に刷毛目をよくとどめている。



図－12　グシク土器および石器

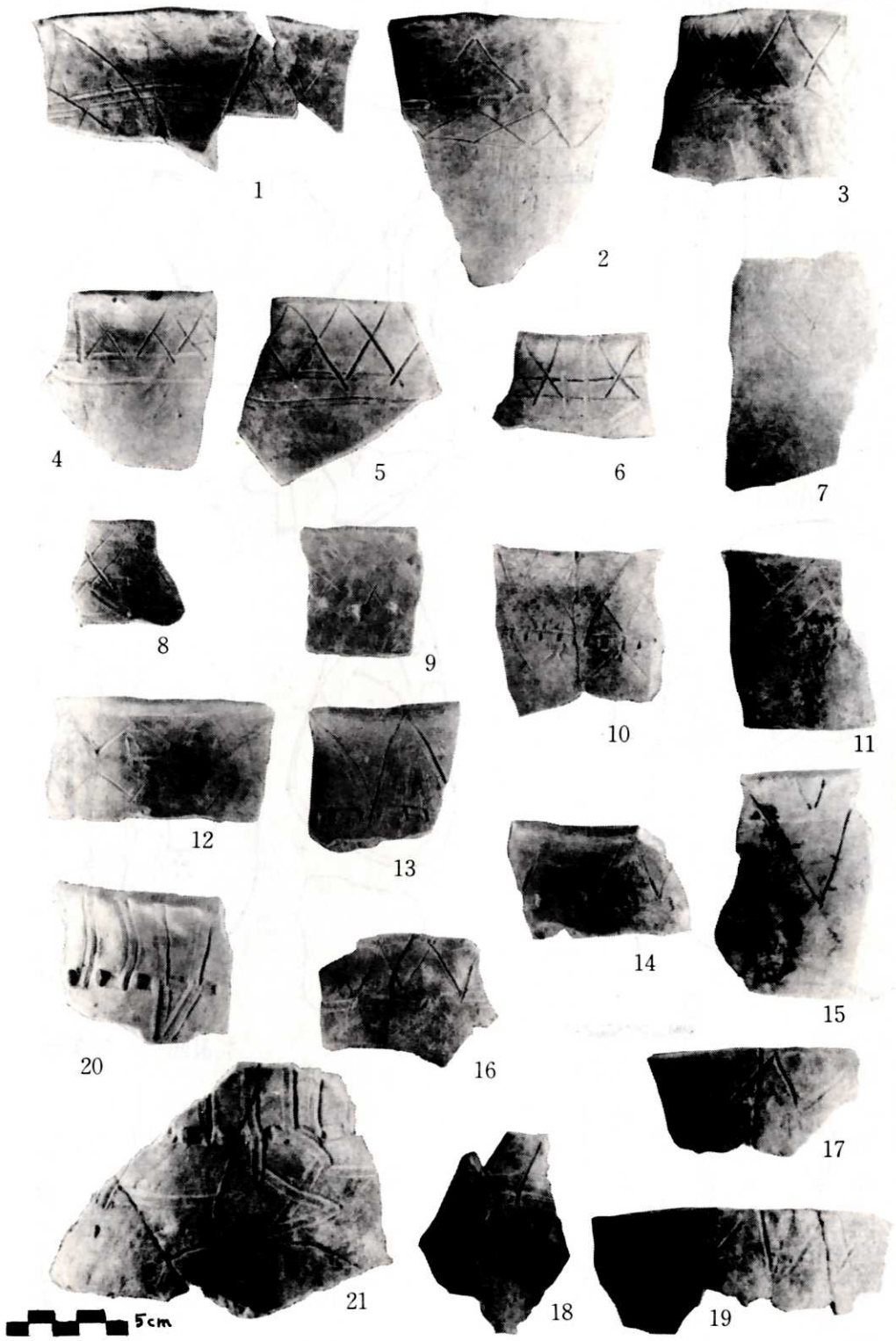
(ハ) グシク土器

鉢形か壺形を主とし、頸部に一、二個のコブを貼りつけている。焼きあがりは良好である。図の7は刷毛目調整をしている。5は大きなコブの突起をもつ。石鍋の影響をうけて作られたと想像され、煮沸用に使われたものと考えられる。

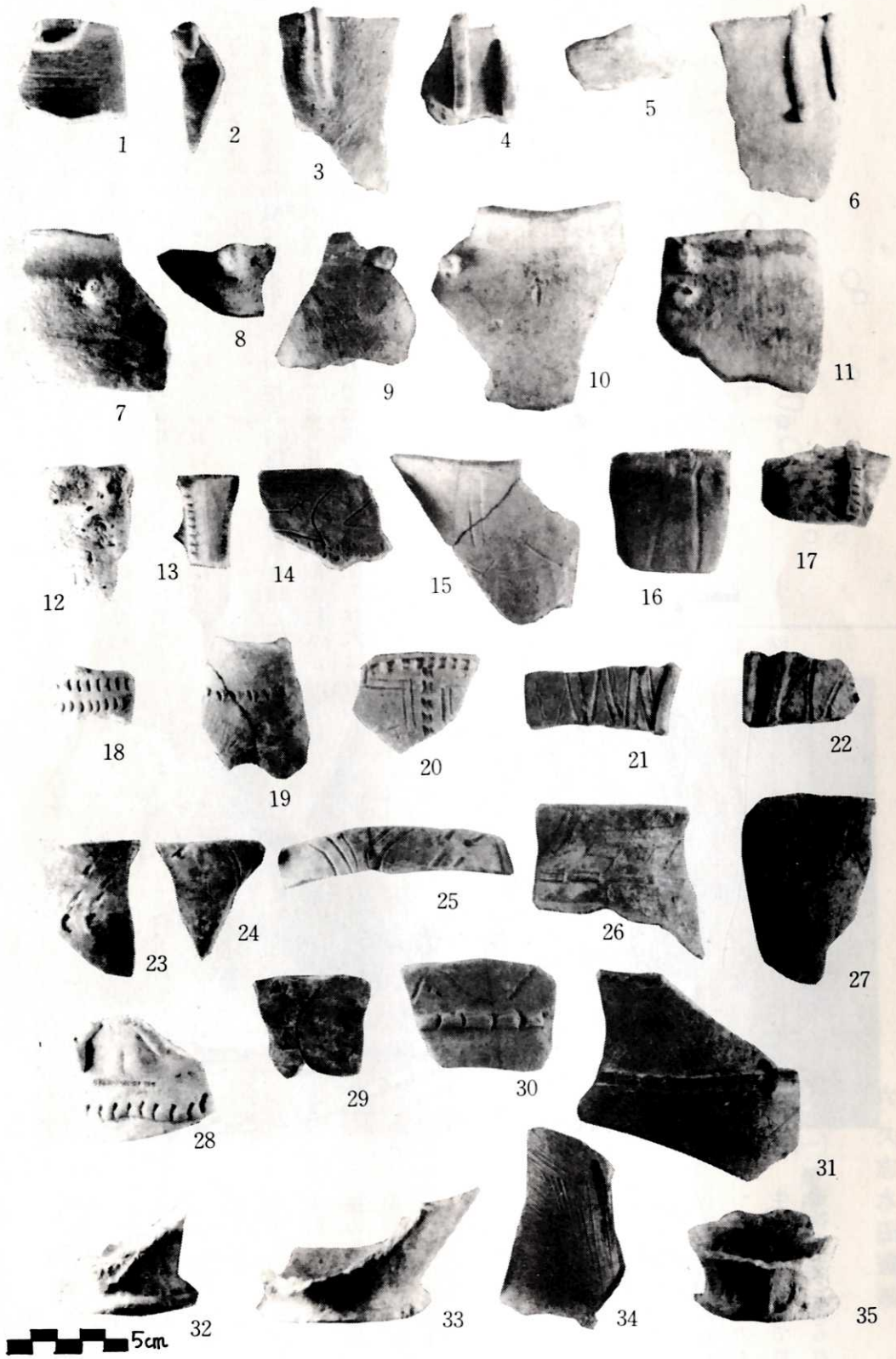
(二) 石　器

石器は六個出土した。敲打器（こうだき）（三）、すり石（三）で、刃器は出土しなかった。素材を近くで求め、整形を施こさず、素形のまま使っている。使う面は平面、側面および先端が利用されているが、打痕からみて、先端の鋭いものに打撃を加えたと思われる。

研磨（けんま）面は平面、側面を利用している。各一例を除き、ほとんど変形していないことから、使用回数は極端に少なかったと考えられる。



写真－2　有文土器　網目文（1～11）　山形文（12～19）　その他の沈文（20、21）



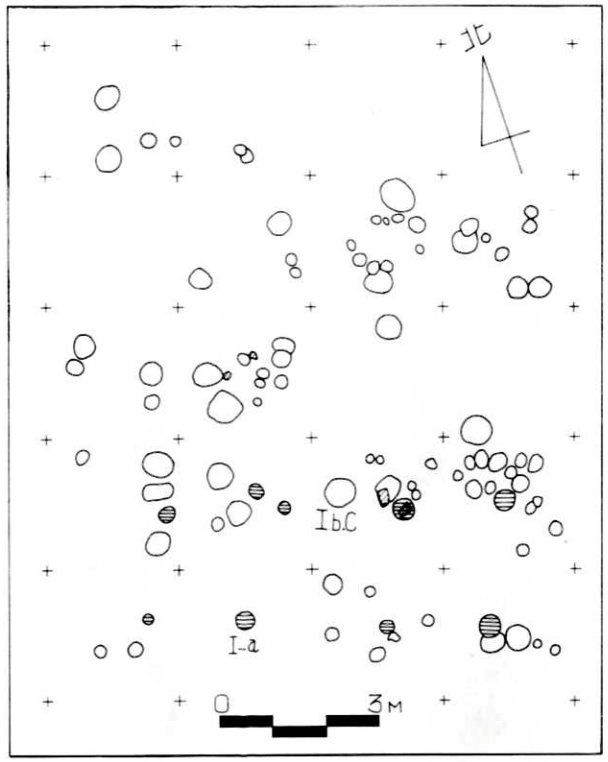
写真－3　有文土器および底部　フェンサド層様式（1～6）　爪形文（18、19）　グシク系（7～12）
凸帯上沈文（13、17、28、30、31）　凸帯上無文＋沈文（21、22）　その他の沈文（14～16、20、23～27、29）

五 近世・近代の遺構と遺物

(一) 遺　構 （B地区の柱穴群）

これは、近世～現代に構築された穴屋跡と思われる。明瞭な形で検出されなかったが、柱穴は何カ所かに集中して掘られていることから、何度も建てかえられたものと考えられる。一例を除き、これらは丸形である。

検出された面はⅡb層に集中するが、柱穴の位置は屋敷造成と深く関連していると思われる。初期の段階では、丘すそにⅡb期の柱穴が多く、後のⅠa期には、現部落道路よりで検出された。Ⅰa期の柱穴は一間おきに掘られているが、Ⅱb期の柱穴については不明である。



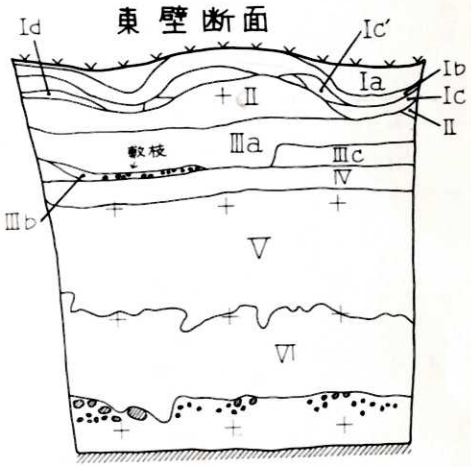
図－13　B地区Ⅰ層柱穴群

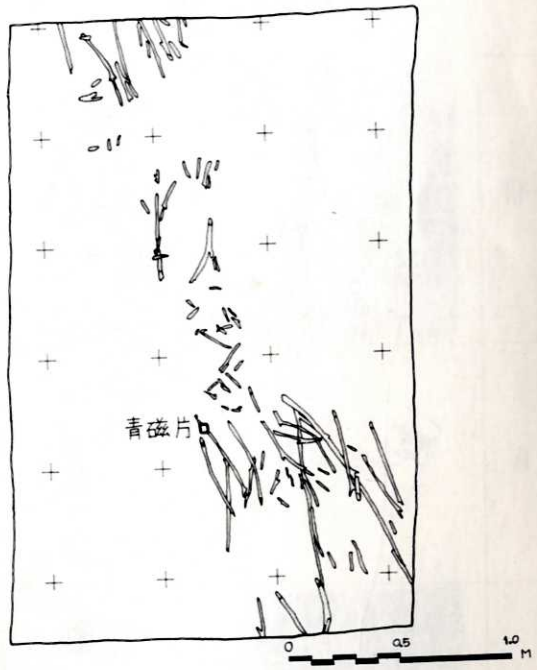
写真－4　陶磁器類およびキセル・刀子

(二) 遺　物

調査地区内から多数の近世・近代の遺物類が得られた。焼物類では、お碗、皿、すり鉢、急須などの小物から、大物のカメまで多種多様の生活必需品が見つかった。

一方、興味深いものとして、石で作られたキセルの雁首（がんくび）が数個出土した。石の雁首は、時たま風葬墓から副葬品として見つかる場合もある。また、漁撈に使われる網の重りも見つかり、当時の人々の生活を知る上で貴重な遺物が多く得られた。





図－14　416番地試掘溝Ⅲ層敷枝遺構および断面図、写真

六 久志水田遺跡

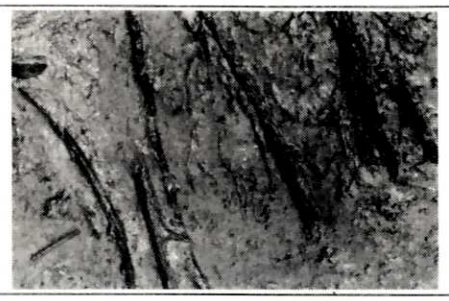
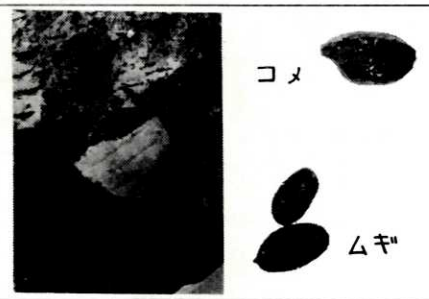
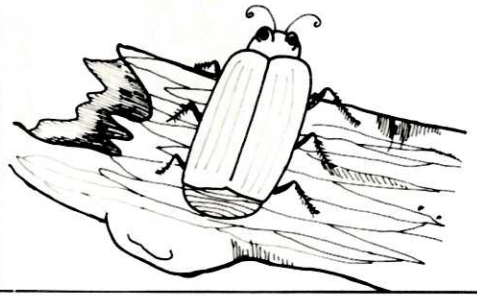
(一) 層序と遺構

この調査の目的の一つである後背湿地の水田開拓の時期を追究するために、後背湿地（こうはいしっち）の奥の部分（四一六番地）を試掘してみた。ここは、袋状になった狭い谷底低地で、近くに部落の拝所、拝泉があり、古くからの水田だと考えられたからである。

二m×四mの試掘を行なったところ、最上層が近代の畑地で、その下に近代から古代に至る水田層が確かめられた。最古の水田層はⅤ層で、一五世紀頃と考えられる。また、Ⅲ層には、近世の木枝を敷いた遺構がみつかり、他に、木杭、板片、籾、昆虫、木の実、木の葉などが腐れずに残っていた。

(二) 遺　　物

表－5　416番地試掘溝の出土遺物

層位	出土物	説明
Ⅰ		・Ⅰ層 明治時代頃、水田を畑地に変え戦前まで耕作していた土。
Ⅱ		・Ⅱ層 明治時代の水田層。近代の陶磁器片が出土した。
Ⅲ		・Ⅲ層 旧王国時代末期（近世）から明治時代（近代）頃の水田の土。下の方から溝に木枝を敷いた遺構が検出された。
Ⅳ		・Ⅳ層 旧王国時代（近世）の水田の土で、染付などが出土した。
Ⅴ		・Ⅴ層 15世紀頃（古代）の畑の土で、中国の青磁片や、当時の米や麦が炭化して検出される。
Ⅵ		・Ⅵ層 15世紀以前の層。昔は湿地状態で自然の植物遺体、昆虫破片が出土したが人工品は出土しなかった。

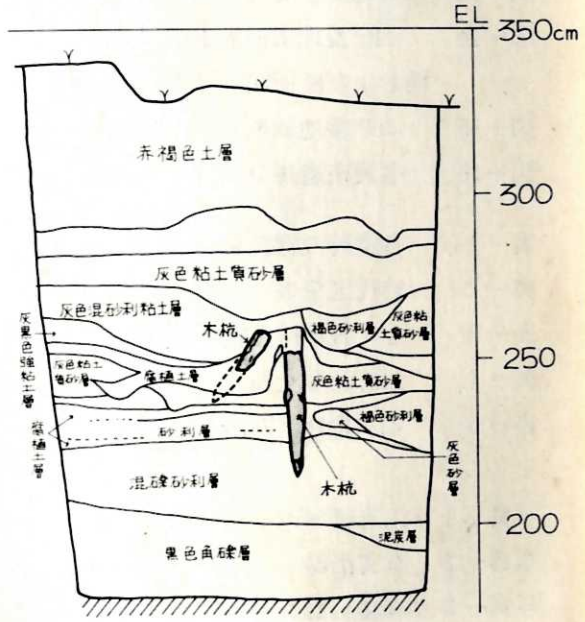
(三) 最下の水田層（Ⅴ層）

四一六番地の試掘で重要な意義をもつものは、最下の水田層（Ⅴ層）である（図－14参照）。この層は、この小さな谷底低地の水田開拓年代と、その当時の水田の状態を明らかにしてくれるからである。

Ⅴ層からは、籾と木杭、板片などが出土し、水田層と考えられる。また、明瞭なグライ層はなく、未分解の有機物に富んでいることから、湿田であったと思われる。その下のⅥ層は、未分解の植物遺体のつまった層で、湿地であったことを示している。こうしたことから、最初の水田は、この湿地を利用した湿田であったと思われる。その年代は、一五世紀頃であったことが、出土した二片の青磁から推測された。

写真－5　460番地試掘溝東壁断面

写真－6　460番地試掘溝出土のクイ



図－15　460番地試掘溝東壁断面図

(四) 四六〇番地の地層断面

四一六番地の試掘に先立って、川沿いの現水田横に位置する低地の地層断面を観察するために、ユンボで掘りあげてみた。その結果、畑地耕土層の下に水田層が存在し、しかも木製品などの植物質がよく保存されていることがわかった（上の図、写真参照）。これにもとずいて、上方の四一六番地を発掘することにした。

おわりに

実に多くの人々の手によって、久志貝塚の発掘調査は進められ、整理作業、そしてこの概報のまとめが成った。今は、感謝の念のみ深い。この概報は、広く名護市民に、遺跡とは、発掘調査とはどんなものかを知っていただきたいと考え、思いきって普及冊子の形にしてみた。詳細な本報告は『名護市史』において編集、刊行する計画である。

調査スタッフ

- ● 知名定順（市文化財保存調査委員）
- ● 安里　進（名護市史専門委員）
- 金武正紀（沖縄県教育庁文化課）
- 岸本義彦（沖縄県教育庁文化課）
- 照屋正賢（嘉数女子学園）
- 呉屋義勝（琉球大学学生）
- 米田善治（琉球大学学生）
- 恩河　尚（琉球大学学生）
- 与那覇朝則（琉球大学学生）
- 家田淳一（琉球大学学生）
- 橋本雅文（琉球大学学生）
- 宮崎泰史（関西大学学生）

発掘作業員（久志部落）

棚原吉子　棚原文子　徳本マカ　徳本カマド　徳本初子　比嘉ウタ　比嘉チエ　比嘉イツ子　比嘉ヨシエ　川上タカ子　宮里利枝子　宮里ミヨ　玉城ヨシエ　伊是名典子

事務局

●島袋正敏　稲嶺進　宮城満　●島福善弘　与儀春樹　又吉美佐子　新里春代　●仲松洋子　仲田米子　宮里健一郎　●中村誠司　比嘉良則

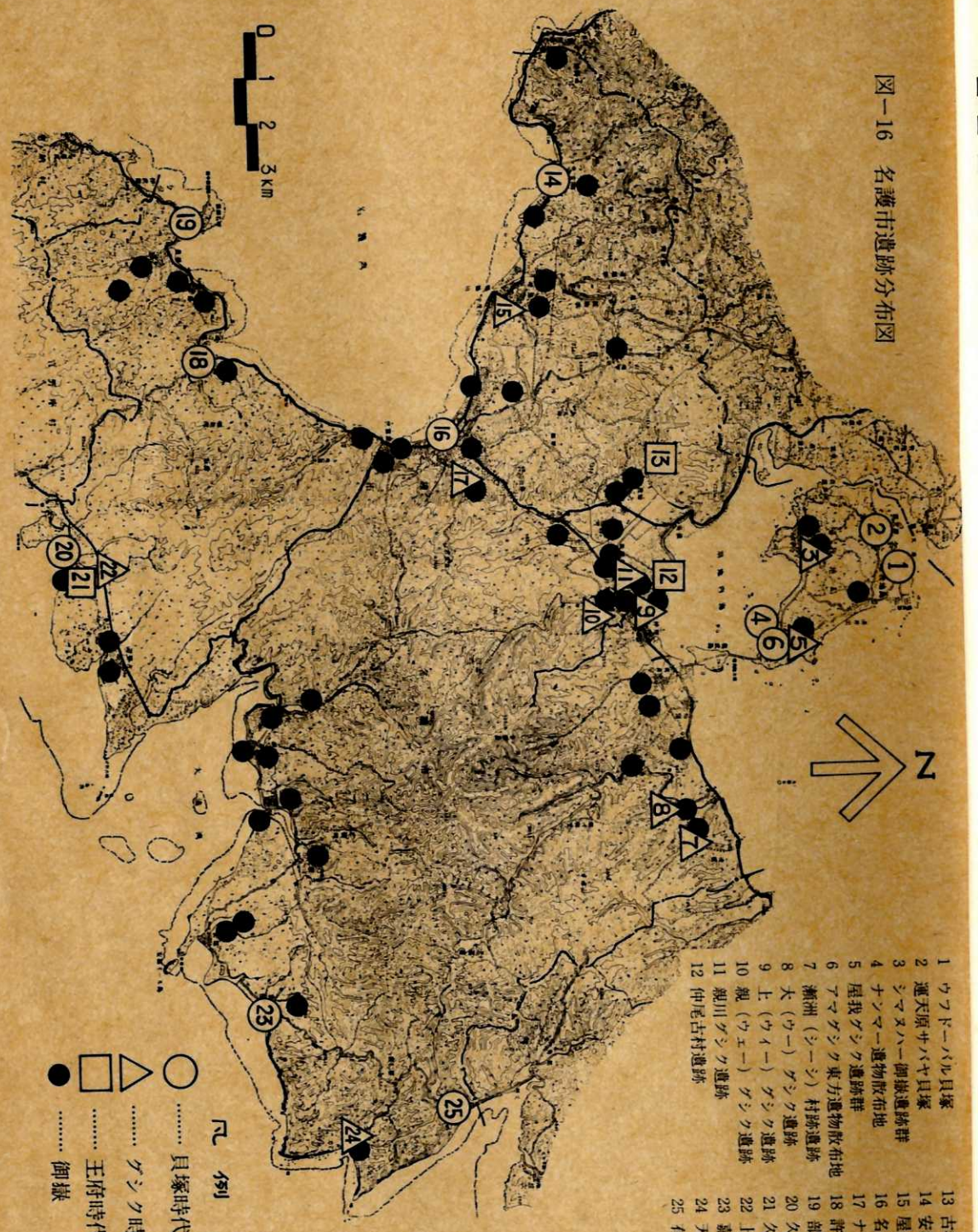
注）●印は本文執筆者

図表目次

図－1　久志貝塚の位置……1
図－2　地形分類図……2
図－3　久志の村落移動……3
図－4　グリッド設定図……10
図－5　A・B地区断面図……10
図－6　1号遺構実測図（道路下）および出土状況写真……12
図－7　B地区重複遺構……13
図－8　有文土器－1……15
図－9　有文土器－2……16
図－10　その他土器およびフェンサ下層式土器……17
図－11　無文土器および底部……18
図－12　グシク土器および石器……19
図－13　B地区Ⅰ層柱穴群……22
図－14　416番地試掘溝Ⅲ層敷枝遺構および断面図、写真……23
図－15　460番地試掘溝東壁断面図……25
図－16　名護市遺跡分布図……27

表－1　各遺跡の存続期間……3
表－2　時代区分表（沖縄・本土）……6
表－3　A・B地区遺物集計表……14
表－4　久志貝塚土器分類表……14
表－5　416番地試掘溝の出土遺物……24

写真－1　久志貝塚遠景……1
写真－2　有文土器……20
写真－3　有文土器および底部……21
写真－4　陶磁器類およびキセル・刀子……22
写真－5　460番地試掘溝東壁断面……25
写真－6　460番地試掘溝出土のクイ……25



図－16　名護市遺跡分布図

表紙写真・久志貝塚出土土器、網目文の土器で久志貝塚の特徴として認められる。

久志貝塚—緊急発掘調査概報
名護市教育委員会 編
名護市文化財調査報告

名護市史
58. 2. 15
寄さん寄
178

202

久志貝塚—緊急発掘調査概報

編・発行　昭和55年3月31日
名護市教育委員会
名護市名護1188
☎ 09805（2）2819
印　刷　崎浜印刷所
名護市名護437
☎ 09805（2）2740